

建築と絵画・彫刻による協働の目的

猪熊弦一郎と新制作協会建築部創設会員による作品・言説をもとに

Purpose of collaboration between architecture and art

Based on works and discourses by Genichiro Inokuma and a founding member of the Building Department of the Shinseisaku

○清水一哲¹, 田所辰之助²

*Ittetsu Shimizu¹, Shinnosuke Tadokoro²

Shinseisaku is an art organization in which artist Genichiro Inokuma aims to unify art through architecture, painting, and sculpture. The founder of the Department of Architecture is a central figure in modern architecture. Why did the architects who laid the foundation of modern architecture seek to collaborate with art? In this study, I investigate the activities of the founding members of the Architecture Department of Shinseisaku in new production exhibitions, and clarify the possibility of finding the unification of architecture and art. To target 1968 from 1949.

1. 研究目的・手法

新制作協会は美術作家の猪熊弦一郎が建築、絵画、彫刻の協働による芸術の統一を目指した美術団体である。建築部の創設会員には池辺陽、岡田哲郎、前川國男、丹下健三、吉村順三、山口文象、谷口吉郎、剣持勇（以後創設会員）といった戦後、日本の近代建築を推進させた中心的建築家が属しているが、なぜ純粋芸術との協働を模索したのか。本研究では、新制作協会建築部の創設会員による新制作展における活動を調査し、建築と純粋芸術の協働に見出そうとした目的を明らかにする。建築部が存在していた1949年から1969年の展覧会と当時の批評、協働に関する言説を対象とする。

2. 新制作協会建築部の創設と原点

新制作協会は猪熊弦一郎が筆頭に当時（1936年）帝展で活躍していた洋画家7名によって、官展に関与せず独自の芸術活動を行うべく結成された。1949年に建築部が創設された際の宣言では、人々の生活の中で芸術が深められる必要性を建築との協働に求めており¹、協会発足時との違いがうかがえる。自由を求める姿勢が芸術の統一という目標に昇華されたといえるが、変化の要因は、戦時中に相模湖の疎開先で芸術家が集まった際、山口文象との親交があり、相模湖芸術家村構想を計画している事だと考えられる。猪熊と山口の対談より²純粋に芸術を楽しむことが語られており、芸術の統一の原点をここにみる。

3. 新制作展における建築部の作品と特徴、動向

展覧会批評では、はじめこそ建築家による自由な表現の場として評価されていたが、会員による建築の展覧会活動の不勉強さによる家具偏向と建築作品の低調

を指摘されている。展覧会そのものに対する批判が多く、建築家の非参加と衰退を指摘しているが、丹下は一回から展覧会形式に異を唱え、前川は早期に脱退している。谷口や池辺はその後も出展を続け、多分野との協働を発表している。また、発足の段階でむしろ家具やインテリアという方向に広げるべきだとの結論まで出ている。³これらのことから、指摘は会員にとっては想定内だったと考えられ、雑誌等による展覧会批評は、建築部発足の経緯や背景を汲んだうえでの作品批評が行われていない。各会員の出展作品は純粋芸術もしくは他分野と建築の協働による可能性を示唆するものであり、展覧会は活動を広く知らしめる場として重要な役割を担ったといえる。また、建築部の発足は美術作家側からの懇願があったと述べられており⁴、他の部からは建築部の構成員と実作において協働ができたことに感謝されている。新制作協会に建築部があったからこそこの親交と実績が生まれていることから、新制作協会建築部またそれに伴う展覧会は、建築史、美術史、両方にとって重要な存在であったといえる。

4. おわりに：協働の目的とその可能性

美術作家との協働によって都市計画、新たな造形美の獲得、といった異なった可能性が見出されたり、協働を通じて建築、芸術を問う姿勢などが見られるが、各建築家に共通することは、機能主義、合理主義から脱却する契機としての新制作協会であり、活動の発表の場としての展覧会であったと考えられる。

5. 参考文献

[1] 『さ・え・ら 新制作派協会「建築部」を設立』新建築、1949年11月号 [2] [3] [4] 編：新制作協会編集委員会『新制作四十年記念素描集』新制作協会、1976年

1：日大理工・院（前）・建築 2：日大理工・教員・建築

表1：新制作展（建築部）が開催されていた年代（1949年-1969年）における猪熊弦一郎と創設会員の活

Table with columns for Year (年代), Exhibitor (猪熊弦一郎, 山口文宏, etc.), Exhibition Title (e.g., 新制作展建築部を創設, 高松市近代美術館), Exhibition Content (description of works and exhibitions), and Exhibition Review (展覧会批評). The table covers the period from 1949 to 1969.

※▲新制作展出品作品 △美術作家などが関係する作品 ◎活動

引用および参考文献：1：『さ・え・ら 新制作展協会「建築部」を設立 新建築、1949年11月号 2：猪熊弦一郎「私の履歴書」丸亀猪熊弦一郎現代美術館、2003年 3：編：新制作展協会50年史編纂委員会『新制作50年』新制作展協会、1996年 4：編：新制作展協会50年史編纂委員会『新制作50年』新制作展協会、1996年 5：山口文宏『壁面と建築』芸術新潮、1950年4月 6：山口文宏『彫刻と建築』新建築、1950年、10月 7：山口文宏『記念の造形』新建築、1955年、4月 8：前川國男『芸術家の歩む道（菅野綾子との対談）』『建築雑誌』日刊建設通信社出版部、1962年 9：吉村順三『建築と設計—私はなぜ新建築の設計から手を引くか—』朝日ジャーナル、1965年、11月 10：丹下健三『建築・彫刻・絵画の統一について—新制作展協会展に關して—』新建築、1949年、11月 11：丹下健三『建築絵画彫刻のレ・ユニオン』アトリエ、1952年、7月 12：丹下健三・阿部展也『建築と絵画の協力について（2）—壁面・その他—』美術手帖、1952年10月 13：丹下健三 岡本太郎 流政之 向井良吉 大高正人 秋山邦晴（司会 川添登）『芸術の統合をめぐる』近代建築、1961年、6月 14：藤田周忠『形を築く人々—雲に遊ぶ日々—』新建築、1950年、12月/3好題『タワウを破ろうとする試み』新建築、1950年12月/滝口修造『第14回新制作展展評』みづる、1950年/『新制作展派展の建築工芸』工芸ニュース、1950年、10月 15：『最近の家具の傾向』新建築、1951年、8月/渡利雄『新制作展の建築を見る』新建築、1951年、11月/『新制作展の家具』新建築、1951年、11月/エリッセル・グレイ『日本の展覧会—新制作展を観て—』芸術新潮、1951年/中井太郎『新制作展展を見て』工芸ニュース、1951年、9月 16：『新制作展—建築部』新建築、1952年、11月/明石信道・清家清『対談 新制作展の建築部について』新建築、1952年、11月/『新制作展協会展』工芸ニュース、1952年、12月 17：『第17回新制作展建築部』新建築、1953年、10月/『新制作展建築部』建築文化、1953年、11月/『新制作展建築部』工芸ニュース、1953年、12月 18：三輪正弘『建築作品の低調が意味するもの』新建築、1954年、11月/『第18回新制作展建築部』建築文化、1954年、11月/『新制作展建築部』工芸ニュース1954年、8月 19：杉本一『新制作展選抜展—もっと何かを—』新建築、1955年、11月/浜村眞『新制作展建築部の家具展示をめぐって』新建築、1955年、11月/神代健一郎『コジキの家と染め物』建築文化、1955年、11月/『新制作展の家具』工芸ニュース1955年、11月 20：『展覧会・ニュース』工芸ニュース1956年、10月 21：剣持勇『新制作展協会展（建築部）の批判に代えて』新建築、1957年、11月/『展覧会・ニュース』工芸ニュース1957年、10月 22：杉田二郎『盛り過ぎない』0周年・新制作展